

## 射手座の明るい新食變星

### V 505 (399.1933) Sagittarii の觀測を奨む

花山急報第58號に既に報じた如く、此の星は昨 1933年 8月22日獨國ゾンネベルヒ天文臺のホフマイスタールの發見によるもので、金森氏(長野縣)が1933年11月17日19時に下降した事を觀測せられた。(花山急報第71號)

最近着のナハリヒテン第251卷の322頁によれば、ホフマイスタールは自身及エンシュ(同天文臺)の捕へた8月28日、9月9日、9月16日の極小及び、同天文臺並にバンベルヒ天文臺の古い寫眞板より導いた極小より、次の要素を得た。

$$\text{日心時の極小} = \text{J.D. } 2425501.376 \text{日} + 1.182873 \text{日} \times E$$

即ち週期が1日4時間半程のアルゴル型食變星で、減光し始めてから、回復するまでの時間、即ち食の繼續時間： $D = 4.2$ 時間、

又、部分食らしく、極小光度の繼續時間： $d = 0$ 時間

$$\text{極大光度} = 6.5 \text{等}, \text{極小光度} = 7.6 \text{等}$$

第二極小、はあつても極く淺いものらしい。

此の星は、明るい上に、變光範圍も4時間あまりの中に1.1等級を上下するから、双眼鏡では少し困難だが、小望遠鏡にて、眼視觀測をするには適當な星である。大分南であるから、歐洲に比して、長期間觀測できるし、又時差の関係上、歐洲で捕へられない極小を捕へられるから、歐洲の觀測と合せれば、短日月の中に豊富な材料が得られる事になる。

スペクトルの研究もその内に詳しく行はれるだらうし、又光度計、寫眞、光電池等によつて精密な光度曲線の觀測もされるであらうが、極小時を數多く決定し、それより週期の變化を研究する材料を得るのは、學術的に見ても意義の深いものである。殊に、發見せられてより時日も經つてゐないから、今後、五年十年と腰を落つけて豊富な觀測をするのはアマチュアにとつて野心的な仕事である。

もう、光度曲線の形も一通りはわかつてゐるから、わざわざ眼視的に光度曲線の形を決定したり、第二極小を捕へようとしたりしないで、極小時の決定に全力を注げばよい。

極小時の前後、なるべくなら、減光しかける頃から、回復するまで續けて、十分毎、できるなら、五分毎に、光階法でやる事が必要である。時間は分まで記録してほしい。

月、雲、低空等、目測結果に何等かの影響を與へると思はれるものは、是非記入せねばならぬ。

ホフマイシタ1は、口径4糎、倍率8のファインダ1を用ゐてゐるが、これ位が適當なものであらう。あまり高倍率ではいけない。比較星と變光星が同時に視野に入る位の即ち少くとも二三度の視野のある倍率を用ゐねばならぬ。

比較星	ボン星表	ヘンリイ・ドレイパー星表	スペクトル	眼 視 光 度	
				ハイバード	ホフマイシタ1
a	-14°5555 (6.4)	186984	A <sub>2</sub>	6.18	6.09
b	-15°5484 (7.0)	187664	A <sub>2</sub>	6.78	7.12
d	-14°5565 (7.3)	187439	F <sub>8</sub>	7.20	7.35

本年中、我國にて觀測し得る極小時の豫報は下の如し。(上記のホフマイシタ1の要素より導く)(花山急報88號に星圖あり)

日本中央標準時					
1934年	5月11日 22.0時	6月27日 1.1時	8月10日 23.9時	9月24日 22.7時	
	13 2.3	7月 1 18.6	12 4.2	26 3.0	
	17 19.8	2 22.9	16 21.7	30 20.5	
	19 0.3	4 3.5	18 2.3	10月 1 1.1	
	20 4.7	8 21.0	22 19.8	6 18.6	
	24 22.2	10 1.3	24 0.1	7 22.9	
	26 2.5	14 18.8	25 4.4	9 3.2	
	30 20.0	15 23.4	29 22.2	13 20.8	
6月	1 0.6	17 3.7	31 2.5	15 1.3	
	2 4.9	21 21.2	9月 4 20.0	19 18.8	
	6 22.4	23 1.5	6 0.3	20 23.2	
	8 2.8	27 19.3	7 4.9	22 3.5	
	12 20.5	28 23.6	11 22.4	26 21.2	
	14 0.8	30 4.0	13 2.8	28 1.5	
	19 22.7	8月 3 21.5	17 20.3		
	21 3.2	5 1.8	19 0.6		
	25 20.8	9 19.6	20 5.2		

紹介

「科學器械」の發刊

東京工政會出版部から去る六月1日附で「科學器械」といふ新雑誌の第一號が發行された。我が國の學術界進歩の一象徴たるを失はない。此の號は時計のための特輯とも言ふべきもので、東京天文臺橋元技師の「天文時計」、JOAKの加藤倉吉氏の「ラヂオによる時報裝置」、逓信省電氣試驗所の木村俊一氏の「水晶時計と音叉時計」、理研の池邊常刀氏の「Phonic Chronometer」、沖電氣會社の押田三郎氏の「複式電氣時計」、東京電氣の櫻井春喜氏の「時計用同期電動機」等、現代の優秀な時計に關する多方面の記事がある。特に此の發刊號は天文愛好者の必讀すべきものであらう。四六倍版、横組で、價45錢であるが、隔月刊である由(7)